

折田先生の人間像（元・7・15）

板倉 創造（昭12文甲）

今紹介頂きました昭和十二年文甲卒の板倉でございます。大体私は学者ではなく、戦前は満鉄に勤め、戦後は日本道路公団という高速道路を造り、又それを管理する仕事を今までやっていました。そういう事で学問とはあんまり関係ない人間で、昔から怠けもので勉強の方はやっと低空飛行で三高を卒業した者ですが、変な事から折田先生と関係が出来たのであります。それは今、井垣さんが言われました様に、故鈴木常夫君が造ったビルディングに紅萌クラブと言う設備があり、そこが五、六年前同窓会の東京支部という事になったわけです。東京支部になったのでお祝いに、こちら京都の同窓会本部には折田先生の胸像（塑像）がありますから、折田先生の肖像画の方を東京に飾るようにとの事で送ってこられたのであります。

私は送ってこられた油絵の肖像画を見た瞬間、どうも気になってしかたがなかったのであります。私の親しい友人に、昭和十三年三高卒業の三浦巖君という水彩画家がおって、私は彼の後援

会の仕事を彼が数年前亡くなるまでやっております関係で、多少絵のことを勉強しております。たせいもあつたからでしょうが、この絵を見た瞬間からこれはとても大変な絵だと直感しました。第三高等学校の折田校長がお辞めになった時に描かれた絵だとすればおそらく当時としては相当な方が描かれた絵であろうと思われたので、一度鑑定してもらふ必要があるという事で、同窓の方達と色々協議致しました。そうこうして居るうちに二、三年経ってしまったのですが、ブリジストン美術館の嘉門館長さんに見てもらったら、これは藤島武二さんの描いた物であることが判明しました。

藤島武二画伯は昭和十二年、第一回の文化勲章を貰つた有名な画家ですが、嘉門館長のお話に依ると、藤島さんも折田先生も共に薩摩出身という関係で描かれることになったのではないでしようか。これは売物ではないけれども売物であれば一億円ぐらいするのではないかというお話が出たので、私達はびっくりしました。これは大変だという事で、大分、絵が汚なくなつてしまつたので、専門の方にお願ひし、綺麗にして本部の方へ送り返しホツとした次第でした。同窓会本部では折角の骨折でもあり、何か一つ折田先生に関する随筆を私に書けという御命令で、では何か書いて見ましようという事に相成りまして、それが同窓会報第65号の「一枚の肖像画」という拙文になつた次第であります。

三高の自由とは何ぞや

私は三高に、昭和九年に入学致しましたが、自由寮の入寮式に、先年亡くなった早川崇君が寮の総代で、新入寮生歓迎の演説をしました。彼は三高の自由について懸河の弁を揮い、「自由は東に孔子、西にミル」と言ったことを記憶しています。孔子は分りますが、ミルとは一体誰のことだろうと思いました。それが後になってジョン・スチュアート・ミルのことだと分ったんですけれども、新入生達にとっては恐らく何か訳の分からん演説でした。三高に入学して初めて「自由」という言葉を聞いた訳です。

三高というのは自由というのが校風であるということとは分りましたが、それからあっちに行ってもこっちに来てても自由、自由で、三高に入ってからというもの、朝から晩まで「自由」を聞かせるるので、やや「自由ノイローゼ」になってしまいました。実のところ、私達にとって、「自由」とは難かしくて、結局わからなかつたんですね。だから二年生になって一年生が来て自由とは何んですかと聞かれると返答出来ない。三年になると知らないという訳にもいかない。「先輩、三高の自由とはどういう事ですか」と尋ねられることが一番頭が痛かった。そこで勿体振って、それは君、ジョン・スチュアート・ミル曰く、あるいは孔子曰くなんて言って誤魔化しました。とても説明出来ないですよ。

昭和九年頃だったと思いますが、大城富士夫先生が「神陵小史」というのをお書きになり、発刊されました。「神陵史」を圧縮して書かれたようですが、実に良く出来た立派な「小史」です。それを早速読んでみましたら、三高の自由は折田校長の人格から出たものであると書いてあるのです。さて、その折田先生からボンと「自由」が飛び出して来るものでもないし、いったい折田先生がどうして三高の自由というものを創り上げたか、気になって色々調べてみても何にも「小史」はじめ「自由」の淵源に就いての資料が見当たらない。だから結局、折田先生は三高の自由の元ではあるけれどもその根源を突き詰めるかどうかどうして折田先生が自由というものを創り出して来たのか分らない。で、私は三高の時非常に気になってしょうがなかった。まあそういう事で私は結局誤魔化し、誤魔化して、自由、自由と言って今日まで来た訳ですが、どうも今度は折田先生の事を書くとなると、どうしても、根本像を極めないと具合が悪くなったのであります。ここでまあ色々研究して今回まで丁度五回同窓会報に、折田校長に就いて書かして貰ったのですが、このところ折田先生という御人格がようやく少し分ってまいりました。

折田先生の人格は如何にして

折田先生は、会報にも書きましたが、非常に複雑な御性格だったと思うのです。茫洋として分らない様な人ですが、私はあの折田先生という御人格はちよっと端倪すべからざるものがある。

それでその根源はどこにあるかと思つてだんだん考えてみると、どうしても二つの要素があると私は考えざるを得なくなつた。一つは、折田先生が少年時代、青年の初期この時代の社会環境、そこから受けた影響、つまり若き日の日本におられた時の影響です。もう一つは米國へ渡つて西洋文明、殊にキリスト教にまともなぶつかつた事実、それによつて受けた先生の精神的なショックですね、そこから先生の人格というものの複雑さが噴出するわけです。その屈折した精神的変化をもつて明治九年、日本へ歸つて來られたと思つてあります。

一、武士道

ここでもまず第一の少年・青年期のことですが、先生は一八四九年（嘉永二年）の一月四日鹿兒島で生まれて居られます。丁度幕末でございます。ついでながら、かの森有礼は先生より二つ年上です。先生のお父さんお母さんは早く亡くなつて居られます。長兄の方に子供が居られなかつたので、そのお兄さんの養子になられました。十四歳の頃です。記録によると八つか九つの時に造士館に入つています。造士館に入る前、私達の教師であつた平田元吉先生のお父さんが塾を開いて居り、その方に漢文を習つています。先生は非常に秀才だったらしく、造士館にも若くして入られたのです。森有礼は十二歳で入つていますから、二歳年上の森有礼よりも早く入つています。

十四歳の年に拔擢されて藩公茂久修理大夫の小姓になります。小姓になった翌年だと思いが、薩英戦争が起こる訳です。薩英戦争が起きた時に、折田先生の父親がわりになっているお兄さんの年昭（寧行）という方は軍役奉行として、イギリスの軍艦に折衝に行っているのです。薩藩としては、イギリスの軍艦を拿捕する計画であつたようですが、あの時薩藩は軍艦拿捕の決死隊を募る訳です。

その中には大山巖とか西郷従道、川村純義等の若い侍達が沢山サインしています。場合によってはイギリスの軍艦を拿捕するという責任をもつた先生のお兄さんはまだ三十歳位の若い侍でしたから、私は折田家は西郷とか大久保家より位が高い中級階級の武士であつたと思います。西郷とか大久保とか大山は武士階級としては一番下つ端ですから、折田家の方が少し位が高かつたんじゃないかと私は思います。でなければ如何に優秀な人物であっても、三十でですね、奉行になつてイギリスと交渉するといふことはちよつと当時としては不可能だらうと思われます。

それから先生三兄（すぐ上の兄）の方は、母方の竹内家に養子にいつています。この方は藩公の右筆つまり書記官で、これも優秀であつたらしいです。この方は戊辰之役で伏見鳥羽の戦に参戦し、それから江戸へ出て常陸の国まで行って仙台藩と戦かい、戦死しております。この方のお墓は最近いわき市の長源寺にあることが分りました。要するにそういう武門の誉れ高い家柄です。折田先生が明治十三年大阪専門学校長として大阪に来て、明治十八年でしたか、自分の家の系

図を作っておられます。それは西南戦争で皆、焼けてしまつて系図が無くなつたので、苦心して作つて居られるのですが、それによりますと、折田家は大体ずっと侍として藩公に仕えて居り、第三代の方は、秀吉の朝鮮征伐の時に島津公にお伴して朝鮮に行き、戦功を挙げたという記録があります。

初代折田権五左衛門から数えますと折田先生は十一代ではないかと系図では考えられます。扱つて折田先生は少年期は、厳しい侍の家に育つて居り、その時期は日本が減ぶか減ばないか、薩摩の国が減ぶか減ばないか、というピンチに立つていた訳です。

薩英戦争も、とにかく一段落をしてから、今度は先生は殿様に連れられて動乱のさ中の京都へ行く訳です。その時京都には岩倉具視というその複雑怪奇な公卿が居た訳です。この岩倉さんと連絡をとることは薩摩にとつて大変に大切な事でした。それで、常に連絡をとる優秀な若い侍が必要となり、先生が其の役を仰せつかったのです。本当は西郷隆盛が推薦したという説もありますが、どうも私は必ずしもそうは言えないと思ひます。

それで先生は簡よばれて、岩倉公の許に行かれた。簡よばれて、というのは誰が簡よんだのかといふと普通、簡よぶのは殿様ですから、やはり藩公の殿様の推薦によつて岩倉公の許に行つたと考へていいのではないのでしょうか。これは明治元年です。ところが岩倉公、ご承知のように具定、具経という子供が居りまして、これが十九か十七か、十八か十六か、そんな年頃でしたが、戊辰戦争

ではこれを東山道の総督と副総督にして、東征に当たらせました。金は持たない、物は持たない東征軍ですから、この東山道の部隊も随分無理な行動をしているようです。

ちよつと脱線すると、例えば相楽総三の赤鋒隊事件というのがあります。この連中は本当は西郷さんなんか江戸の攪乱に使った連中ですけども、この赤鋒隊の相楽総三一派を偽官軍として皆殺しにしています。それから郷里に謹慎して居た小栗上野介を斬殺して居ります。

岩倉二公子はずうつと奥羽の白河の方まで行くんです。頭にかつがれて居ただけであつたにせよ、この二人はかなり苦勞されている訳です。岩倉公が子供達と連絡をとる人がいないといけないわけで、それが折田先生であつたのです。折田先生は要するに連絡将校です。岩倉さんの命令で折田先生は二回ほど現地に行つています。その時にやっぱりチャンバラをやつてゐるのではないかと思われれます。先生は戊辰戦に参加しただけでなく、岩倉公のお伴をして、大阪に微行したりしています。先生は「功勞すこぶる多し」と自分の系図に書いておられます。先生はめつたに自分のことを誉める人ではないんですが、そう言つて若かりし日のことを記述して居られます。

岩倉二公子が奥州に軍を進めて居た時、突然岩倉公からの命令で、具定、具経は辞任して京都へ帰ることになりました。周りの人達はみんなびっくりしたようです。せつかくまだこれから奥羽戦争が始まろうとして居るのに、大将、総督を辞めさせるとはどういうことかと言つわけです。さすがに岩倉公です。もう勝負は見えた。だから息子達をアメリカへ留学させようと考え、それ

で帰って来いと言われたのです。

それで折田先生も、この機会に岩倉公に是非おいとまをいただきたく申し上げて「水本塾」という英語塾とかに行つて英語の勉強を始められたのです。そして、岩倉公もびっくりしました。いや、息子が今帰つて来るから、お前、それを連れて長崎のフルベッキさんのところへ行つて、英語を勉強して来い、とこういうことになつたようです。折田先生は、又それではしようがないということ、今度は二人を連れて長崎へ行くことになつたわけです。

大久保利道は、明治三年の早々に、華族とか、殿様とかの子息で優秀な連中を外国へ留学させる計画を樹てたやうで、岩倉二公子も選ばれて行くことになつたわけです。岩倉公から折田先生に、二公子のこと「ひとつ頼むよ。」ということ、アメリカへ先生も一緒に行くことになつたものと思われまゝ。これは明治三年です。

ところが三高の校庭即ち今、京大教養学部の前庭にあるあの先生の胸像の裏の方に書いてある碑文には、明治二年と書いてありますが、あれは間違いです。明治三年の一月か二月頃に出発されたのです。そういう事で、日本から離れることになるんですけれど、長崎に遊学の約一年の間に折田先生はかなり文明化してはいますけれども、先生は武士道の精神とか、忠君愛国の精神とか、そういうものも、もう身に染みこんでます。そういう精神でアメリカへ行つたと推量されます。それで米國に渡り、やっぱり大変びっくりしたと思ひます。

例えば森有礼はその二、三年前に英国留学生として薩摩から十五人行った中の一人ですが、あの連中は侍ですから両刀をたばさんで行ったのですが、途中で具合が悪いついていうんで刀を取りはずし、チョンマゲの毛もざんばらにし、ブラサガリの洋服も、香港かシンガポールかで買って、その洋服を身に着けて、二か月余りかかってロンドンへ行ったわけです。

二、キリスト教と西欧文明

彼等は薩摩藩の発展のために行つたのです。ところがロンドンに行っているうちに、藩の爲とていうより日本のためにやるべきだというふうになる。そしてキリスト教や英語も勉強しているうちに、日本人をちよつと越えて世界的な考え方をする人間に成長していく。そこに彼等十五人のきびしい運命があるわけです。結局は十何人行きましたけど、半分はかなり悲しい運命にさらされる、というのは、もう殆んど日本人でなくなつてしまつたからです。

欧米をくるつとまわつて歩いているうちに、薩摩藩の侍でもなく、日本人でもなく、またもとよりイギリス人でもなく、アメリカ人でもなく、妙な世界人になつてしまつた。それで日本へ帰つて来ると人並み扱いされなくて苦勞することになり、自殺した人さえいます。森有礼みたいに成功した人ばかりではありません。

ちよつと脱線しましたが、折田先生がアメリカへ行かれて、やつぱり一番ショックだったのは

キリスト教だと思っんです。

その文化ショックについては後で触れることにし、先に米国留學生のことを申しませう。明治三年当時米国には留學生がたくさんおるのです。留學生のことを申しますと、私は徳川の政府が偉いと思うのは、オランダは勿論ロシアにも、アメリカにもイギリスにも、フランスにもドイツにもみな留學生を出していることです。何も新政府になってから行ったんじゃないんです。もういずれ将来は、こういう連中を使わなきゃいかんというので、幕府は幕末に優秀な人材をどんどん外国へ出してゐるんです。

明治政府はそれを真似て留學生を沢山出したのです。明治五年の頃になると、三百五、六十人ほど留學生が多くなり、文部省の予算が八十万円で、留學生の費用が十何万円で、とても財政負担が出来ないということになり、一斉引き揚げを命令することになりました。折田先生はまだその前の話で、明治三年に行くわけです。そして大体の學生はニュージャージー州のあの、ニュー・ブランズウィックという所のラトガルス大学に入るので。

ラトガルス大学というのは、今日も有名な大学ですが、この学校はオランダ系です。フルベツクもオランダ系ですから、だいたい日本に来てる外国人では、徳川時代からの因縁でオランダ系が多かった。そこで、オランダ系のラトガルス大学に、大概の學生はまず草鞋を脱ぐという格好で、ガヤガヤ多数の日本人留學生が居るわけです。だから、そんなところにおったんじゃ、日本

語でしゃべってばかりで、英語の会話の勉強も出来なくなるし、これではさっぱりです。私は、折田先生はそこを考えられたとみえて、ラトガルス大学に入らないんです。それでプリンストン大学の受験勉強を始めたのでした。

ミルストンの、コールウイン牧師さんとこ行って一年半も受験勉強するのです。英語、ギリシヤ語、ラテン語も勉強しています。そうして、目的のプリンストンの試験を受けて明治五年六月合格しました。あの当時本当に勉強に志した連中は、ラトガルス大学に多くは居ませんでした。例えば、東大総長になった、あの会津藩の山川健次郎なんかは、開拓学生として行きましたが、エール大学に入って居ります。その後、日本に留学生で活躍している人は、ラトガルス大学を出ている人よりも寧ろ、金子堅太郎のようにハーバードとか、エールとか、プリンストンとか又アーモスト神学校とか、まあ、そういう大学、その他の学校を出た人が案外多い様です。

折田先生は、プリンストン大学に入って、そして四年間、とにかく語学はギリシヤ語、ラテン語、フランス語、ドイツ語、英語と五か国語やるんですから、これは大変だったと思います。それを、とにかくやりとげたんですから、これは実に偉いものだと思います。

そのプリンストン大学の総長はマコッシュという方ですが、この方に先生は非常に可愛がられるし、先生も総長を非常に尊敬しています。プリンストン大学があの南北戦争でガタガタになったようです。その時に大学を立て直したのが、マコッシュ総長で、この方はスコットランドから

招聘されて、二十年間総長を勤めております。丁度折田先生がこの大学に入学しました時には、総長になって五、六年たった頃で、非常に良く指導してもらっています。キリスト者として大変立派な方であったようです。それから、奥さんのイサベラという方も、折田先生を非常に可愛がってくれています。

先生が入学されるちょっと前に岩倉使節団が米国に来ております。其の時先生はまだ浪人して、勉強していましたから、余り使節団のお役に立たなかつたかもしれないけれども、岩倉公はじめ知人、友人、殊に薩摩出身の方が多かつたので、それのお世話に非常に苦労しております。

大学に入られて四年間、先生は宗教、学問、運動、あらゆる点においてみっちりやって居られます。同学の友達が又実にいい友達が多かつたようです。例えばスチュアートとかスタムレーとか、ハミルトンの三人とは大変仲が良かった。それから、可愛い女の子から恋をされています。ケイト嬢という、このお嬢さんから、日本へ帰ってきてからもお手紙が来ています。折田先生は、あのご承知のように美青年ですから、もてるのあたりまえなんです。少し脱線致しましたが、先生は大学に入った時からキリスト教の勉強は徹底的にやります。とにかく学校の教会には一日三回位行くこともありました。ちょっと異常なくらいです。祈禱会には毎回出席します。

マコッシュ総長の朝礼のご挨拶は一週間に二回くらいあるんですが、必ず熱心に聞いています。明治五、六年と言えば、日本ではまだ刀を差している様な時ですが、この大学では既にレガッ

タとフットボールと野球が盛んです。それからクロツケー、クロツケーが盛んです。これ女性もやりますから彼女らと戦って大いに楽しむわけです。余談ですけれど、先生が日本へ帰ってきて文部省に入り、明治十三年から大阪に赴任されるわけですが、大阪中学とか大学分校時代、あの時代に大阪ですでにクロツケーをやっておるのです。

あれは折田先生が、昔大学時代に楽しんだクロツケーとかフットボールとか野球、レガッターというものが懐かしくてしかたがなくて、ああいう貧乏な学校でも無理してレガッターを買っておりますし、クロツケー部が出来たりしています。これは学生時代に対するノスタルジーだと思います。話が前後して恐縮ですが、先生の大学生活は実に素晴らしい。

寄宿舎で病気をすれば友達に来て徹夜して看病する、そして病院の先生は診察にやって来てもお金は取らないとか、非常に温いですね。私はアメリカのああいう大学の良さというものを先生の日記五冊を読む事によって非常に感動するんです。四年の大学生活も終りになり、丁度明治九年の六月に卒業する事になる訳なんです。先生は卒業の前ですが、先生は学校の教会で英語で演説をされます。成績優秀な学生に認められるもののようにです。

「日本の過去及び現在」という大変大きいテーマでこれを英語で演説する訳です。流石の先生も発音に苦慮されたらしく、大学の先生と契約して十回分いくらと払って文章も発音も直して貰う。又友達もやって来て夜寄宿舎で話して直して貰う、そういう苦勞をするんです。そしてこの

「日本の過去及び現在」という演説は非常に評判がよかつた様です。教会堂には沢山の聴衆が集まってくれて嬉しいと本人も非常に喜んでいます。だがそういうキリスト教の勉強をしていながら洗札をそれまで受けていない。ところが明治九年の卒業直前の五月、五月十八日だったと思いますが、先生はとうとう洗札を受けるのです。マコッシュ総長が司式して壮嚴に行われ、先生は非常に感動してその日のことを日記に書いておられます。要するに米国で六年半もキリスト教と接しながら最後の年に洗札を受けられたのです。

私は折田先生を考えるたびに森有礼さんと新島襄さんのことを、どうしてもこの三人を一組にして考えるくせがついて居ります。というのは、森さんは折田先生と本当に親しいんです。

彼は明治四年、五年の頃は、弁務使（公使）としてアメリカに在勤して居る時、岩倉使節団の世話をしたり、いろんな活躍をしています。折田先生にはしよつ中手紙を書いています。折田先生も何回も手紙を出しています。彼が色々「本」を書いてはその都度必ず先生の所へ送つて来ています。「日本に於ける宗教の自由」といったような著作です。要するに日本の言葉を止めて、英語にせえとかね、こういうような意味で目茶苦茶なことを言つて居るわけですが、森有礼という人はそういうことを断固してやる人ですね。これは、天才的な人だと思います。この森さんが折田先生を非常に可愛がるわけです。折田先生も、森さんに対しては非常に敬意を表わしておられます。二人の関係については後で又、触れることに致します。次に、新島さんの事に就いて少

し述べることにします。

新島さんは例の岩倉彼節団の時に田中不二麿理事官の下に、ヨーロッパ迄付いていくわけです。あの人は、まあ同志社関係の人は、キリスト教を勉強に行った様な積りでおるでしょうけども、そうじゃなかったと思います。我々の時代に教えを受けた中瀬古六郎先生ですね、化学の。あの先生なんか言わせると、新島さんがアメリカに行ったのは、軍艦とか船舶の勉強に行ったんだと言うんです。決してキリスト教の勉強に行ったんではない。たまたま日本を脱走して行った先のボストンの船会社の社長がハーデイさんといひ、ハーデイさんが非常なクリスチャンで、ニューヨークランド地方で立派な人として尊敬されていた方です。此の方の影響等があつて、新島さんはアメリカに行つて一年後には、もう洗礼を受けてるのです。折田先生は六年も経つて洗礼を受けている。ここに人柄の違いがあるように思われます。私は、森さんは政治家らしい政治家であつた。政治家と言つて政治屋と区別のつかない此頃であるから、経世家と言つた方が良いと思ひます。

森有礼は経世家である。素晴らしい経世家であると私は考えています。それから、新島先生は宗教家である。宗教家であるから、ひよつとして神様に近い様な人だから、早く洗礼を受ける事が抵抗無いんですね。折田先生は極めて人間的です。宗教家じゃないんです。折田先生は洗礼を受けた時、あれ程感動しながら、何故日本に帰つて来て宗教活動をしないのか、ということですが、

折田先生は、宗教というのは個人の信念の問題だとはっきり切り切つて居られます。だから、あちこち行つて宣伝したりするという事は、折田先生の好むところじゃないんです。そういう意味に於いて、折田先生が、日本に帰つて来て、宗教活動しなかつたという事について、色々批判もあるかと思いますが、其の精神がよく分る氣が致します。

帰国後の先生、教育家として

折田先生が三高を辞められた時、読売新聞に言われている言葉が、これが明治四十三年の十二月一日号の読売新聞の特集号に載っています。その特集号に於て折田先生が、「回頭 三十年の感」、頭を巡らす事三十年の感懐ですね。こういう事を言つておられます。

「顧みれば在職三十年。或る規定の下に人を教育するのだから、況又学校は自分の物では無く、いつ校長が変わらぬとも限らぬものだから、自分の意見、方針をきわどく表わす事はしなかつた。特殊な校風を打ち立てる事もしなかつた。唯唯京都という土地柄だけに、なるだけ柔弱な風を去つて剛健な氣風を養わせんと、云々」とあります。

私がこれを読んだ時、あ、これは新島襄さんの事を考へて発言されておるなと思つたのです。其の時新島先生は、もう亡くなつて居るのですが、新島先生は自分の信ずることは遠慮なく言つています。自分の信念で創つた自分の学校ですから、それが出来るわけです。ところが悲しいか

な官立の学校は校長でも何時首になるかわかりません。三高生よ、君達はクリスチャンになれと、到底言えないでしょう。だから折田先生は、自分は三十年間学校の校長をしておったけれども、特殊な教育はしなかったよ、とこういう事を言ってるのですね。これは先生の溜息だろうと思うのです。

折田先生が気の毒なのは京都へ来てからです。けちのつき始めは自分の尊敬する先輩の初代文部大臣の森さんが殺されたことでしょう。彼は明治二十二年二月十一日憲法発布の日の朝に殺されました。その半年後の八月に三高は大阪から移って来た訳です。だから先生は京都に来る時大変落胆して来てる訳です。そんなに浮き浮きとしては来ていない筈です。果たせるかな九月十一日の開校式の時は暴風雨です。二百二十日の暴風雨。私は、三高の前途がそれによって判るような気がするのです。二十七年になったら学生改革で三高がバラバラにされる。皆、予科生は一高や二高、四高、山口高校とちりちりに散っていききました。そして三高は専門学校になるわけです。専門学校になったと思ったら今度は二、三年経って明治三十年、京都大学が出来て、又三高は元の性格の学校へと復帰させられる。こういう馬鹿げたことをじつと折田先生は我慢していかなくやあならない。折田先生は京都で涙の年月を送っているのです。私はそう見るのです。ただ、折田先生は学生からは勿論、教授達からも頗る尊敬されているから、先生は表面は悠々と楽しそうにして居られる。しかし心の中では涙を流している日が多かったと思われます。折田校長勇退

特集号（読売新聞）の中で大浦兼男男爵の談話が載っています。

「折田さんが京都大学が出来た時に、当然に京都大学の総長になるべきであった。然るに、時の文部大臣は何と思つてか、一高校長、文部省の専門局長をした木下広次氏を総長にした。この時若し普通の人であつたなら、不平を起して三高の校長の椅子を退くか、または何等かの方法を尽して木下氏に代るか、左もなくば之を償ふに足る榮譽を欲したであらうが、ところが折田さんは怒らず、動ぜず、泰然自若として心中いささかの不平なきが如くであつた。私が折田さんを知つて以来三十年間、この時程深い感動を与えられた事はない云々」と話している。つまり世間では、当然折田先生は京大の初代総長になるものと思つておつたのです。しかし残念ながら折田先生は、森さんが亡くなつてから、その運命の齒車が狂い始めているわけです。

森さんは初代文部大臣として学校令を明治十九年に出す時に、その準備の為とにかく無理やり大阪の校長を一時人に任せて、「お前すぐ来い」ということで、先生を文部省へ引張り、学務局長として二年間働かしているでしょう。そして学校令を出して、大学・中学・師範学校令・小学令を出したら、「あ、お前は大阪へ帰れよ、ありがと、いずれ三高を大学にするのだから、お前京都へ行つても、そのつもりでやつて呉れよ」ということであつたと思われまゝ。ところが、森さんが殺されてしまふ。その時から齒車が狂つて来るわけです。折田先生と同郷であり、明治十五年以来の友人大浦男爵が怒っているのは、そういう事情を或る程度知っていたからでしょう。

彼は一体京大の創立委員長であった折田さんを総長にしないとはどういうことであるかと本当に憤慨しています。要するに折田先生というのは、少年期、青年期の武士道の環境と、米国の西洋文明、キリスト教との双方の接触によって出来上った特殊な人格でした。

一体三高の自由という校風は、いつから出来たか。これは問題です。折田先生が自由ということとを特に言った記録は知りませんが、明治三十年代の頃から、大体そういう空気が出て来ているようです。明治四十年代では、はっきり我校は自由である。これは折田先生の人格から生まれたものであるとちゃんと明治四十三年の嶽水会雑誌にも出ています。だから私は、三高の自由ってというのは、やはり京都大学が出来た前後からだという気がするのです。

京都大学を創るには御承知のように西園寺さんなんか創設に熱を入れています。西園寺さんはフランス革命思想の影響を受けていると言われます。ですから京都大学は最初から自由思想の流れがあつたわけですが、しかし、その前から折田先生の思想がやはり京都大学に流れて行つてると思われます。というのは木下初代総長は一高校長時代、籠城主義を唱えた人で、籠城主義、つまり一高生全部を寮に入れて世間と隔離して教育をやる方針を樹てたのが木下広次先生です。

京都大学がスタートした時の学生は五、六十人しかいませんでした。三高の構内に同居したわけですが、そこに第三高等中学の専門学校生徒の連中が数百人おるわけですから、どっちが大学か分からない。そういう状況のもとで、木下先生も京都に来て吃驚されたと思うのです。まるで

一高や東京大学なんかの雰囲気と違うんですから。それでこれじゃあ仕様がないなということでしたでしょう。まあ三高の折田流に同調することになる訳です。それと、西園寺さん達の考え方も入っている。だから京都大学というのは、やっぱり生れた時から、いろいろな血が入っていると思うのですが、いわゆる東京の昌平黌とか大学南校とかから生れた学風の雰囲気とは京都は最初から違う訳です。京都大学のことはこの位にして、又、三高に戻ります。

三高というのは普通の高等学校とはちよつと違う、まことに不思議な学校です。卒業生に共通している点はどちらかというところと、型があんまり型にはまらない。これが三高同窓生の特徴である。そして、この三高の特徴がどこから出て来たかという大きい問題にぶつかるわけです。折田先生の人格が基であるといわれるのですが、私は手繰って行くとプリンスン大学のあるニューイングランド一帯のリベラルエデュケーション・体育・知育・徳育をまとめて教育をして行く、リベラルエデュケーションから流れて来ていると思います。新島襄さんの入学したアモスト大学も、リベラルエデュケーションを盛んに唱えています。ニューイングランドでは当時の一般的傾向であったと思われまます。

三高という学校は折田先生の気持ちで言えば、プリンスン大学の分校なのです。東京大学の分校じゃないんです。折田さんの気持ちで言えば三高はプリンスン大学の分校だという気持ちなんです。それは、小っげな学校かもしれませんが、折田先生にとっては夢にも忘れること

の出来ないプリンストン大学其の物なのです。三高という学校はどっかハイカラでしょう。他の旧制高校みたいにバンカラで朴訥とか剛健だとかというところが少ない。

三高っていうのは紋付き着たりしている連中は昔から余り尊敬されなかったようです。どちらかと言えば、髪ぐらい伸ばしてシャナリシャナリとしておった奴が何となく偉そうにして居た。織田作之助みたいに着流しで、女をつれて学校の周りを歩く奴もいましたけれども、あれはともかくとして、三高はどこか他の高等学校とちよつと違う。これは考えてみると、折田先生の人格がプリンストンの流れの中に形成され、そしてその流れの中にキリストが入っているということはどう否定できないと思うのです。今我々は、キリスト教に就いてはあまり違和感がないですが、幕末の時代は全く今と違うのです。今ここに幕末の士を一人つれて来て、我々と会話してみるとお互い何を言ってるかさっぱり分らないと思うのです。つまり彼は藩の為を先に考えて国の為と云うことはあまり考えない。それから刀を差して無礼者という調子でやっていますから、人類愛とかなんとか話したってそんなことは全然通じないでしょう。ですから我々、今の日本人というのは、明治からの、折田先生時代から流れて来て、我々は自分じゃなんとも思っていないのですが、やっぱりキリスト教の精神というものが日本の社会の中に深く入って来てると思うのです。

旧制高校の中では、三高が最もリベラルだということは、キリスト教精神と西洋合理主義というものを比較的早く身につけたことに由来すると思います。それは何故かというと、折田先生が

人格の尊厳・精神の自由、これを身を持って体現していることに大きく依存していると考えていいんじゃないかということです。明治以降勝れた教育家って沢山出ていますけれども、教育家って言うとは何か専門家みたいで、法律・経済・歴史を唯教える先生みたいになってしまふ。だから私は折田先生は教育家ではなく教育者だと考えたいのです。

教育者というのは教育家というよりちょっと広いと思うのです。先生はしかも大教育者なんです。つまり、英語とかドイツ語とか教える人じゃないのです。人間を教える教育家であるから真の意味に於ける人間の教育者である、というふうに私は考える訳です。私は何故、今、折田先生と折田先生とこう言っているかというと、私の考えは、この次の号（三高同窓会報第七〇号）に出るので、それを読んで頂ければ有り難いと存じます。

折田先生「奨学基金」の創設

私は次の様な趣旨を書いて居ります。三高同窓会の皆様は一日一日老いていく、いずれ一人もいなくなる日が来る。三高同窓会は消える。しかし、折田先生だけは永久に残る。いや残さねばならない。折田先生の精神というものは、三高を越えて行く精神を持っている。だから何とか我々の浄財を持って「折田先生奨学基金」というものを作って、そして京都大学始め、プリンストン大学学生達から優秀な論文に対して補助したり、あるいは留學生の交換に何か援助する。そ

ういうことによつて、折田先生の優れた人格を日本だけでなく世界に永久に残したい。我々は一人もいなくなつてもよい。しかし、今後も京都大学の教養学部のある先生の像は依然として残っている筈です。

私としては三高がなくなるまで、同窓会がなくなるまでには、そういうものを作つてほしい。少なくとも百二十五年記念、後二―三年経てばなるが、その時は三高同窓会最後の事業としてです。そういうものを作つて頂いたら大変ありがたい、こういうふうを考える次第です。

こちら辺で大体結論とさせて頂きます。「折田先生の人間像」というテーマの講演としては、まことにお粗末で、先生に申し訳けなく深く恥じいる次第です。

御静聴ありがとうございました。

補記

以上の拙い講演は、題名が「折田先生の人間像」と云う大きいテーマに拘らず時間の関係もあり、少し省略し過ぎ、三高の自由論になつてしまいましたので、それを補充する意味で、三高同窓会報第六号から第七〇号までの拙稿「一枚の肖像画——折田彦市先生の人間像」六回分をお読みただければ、大変有り難いと存じます。その拙稿も独断に基くものかなりあると存じますので、御叱正をお待ち申し上げます。

(ハイウェイ・トル・システム顧問)
元日本道路公団理事